京都大学 OCW　　人種の表象とリアリティ
2007．12．26

担当　竹沢泰子

第 12 回　質疑応答・ディスカッション

今回は、まず授業の出席者全員に質問してもらい、その後専門的知識を要するところは竹沢が回答し、残りはディスカッションとしました。
これまでまとまって深い議論をする時間がなかったので、良い機会となりました。今回の授業で出された質問はいずれも根源的な問題を鋭くつくもので、このオープンコースウェアに参加している幅広い読者の方々も共有する疑問やコメントだと思います。以下、質問やコメントに正面から、かつなるべくわかりやすい文章で答えるように心がけました。感想をお寄せ下さい。

主たる質問と討議内容
（類似した質問はまとめてあります）
Q　犬などでも、種類によって性格が異なります。人間の場合も人種間で本当に性格が異ならないのでしょうか。
A　犬の場合は、人間による人工的圧力が加えられており、ヒトの場合とは大きく異なります。血統を商品化するため、ブリーダーが「純血」を選りすぐり再生産することを第一とします。その過程で、純血ではないものは基本的に「雑種」として排除され、「雑種」の間の多様性が認識されることはありません。雑種間の交配は、ブリーダーが介入した交配とは根本的に異なります。つまり人工飼育や人工再生産による影響は大きく、種の多様性は結果的にかなり偏りの強いものとなるのです。
　さて人間の場合ですが、まず集団内の差異の方が集団間の差異よりはるかに大きく、アプローチやサンプルの異なるさまざまな研究結果によっても、大大陸間の差異は 1 割前後だという点で、ほぼ一貫しています。個体差は差異のなかで約 9 割近いのです。
　次に人間の集団間の差異が全面的に否定されるわけでもないことも重要なポイントです。それはコンピューターグラフィックスのカラーグラデーションを見たときの、赤と青の差異を想定すればイメージしやすいと思います。本当は

その間にあるのは、勾配（クライン）であって、境界など存在しないのです。気質等についての遺伝学的研究はまだ遅れています。外見の特性についても、多様性を否定するものではないので、差異が認められて当然なのです。ただしそこでも食習慣や気候を含めて環境要因が常に大きく働くことを忘れないでください。

Q　生物学的人種は存在しないということですが、風土や環境も異なるし、生物学的な差異はあるように思えるのですが。
A　生物学的「人種」の存在を否定することが、すなわち生物学的多様性を否定することにつながらないことを強調しておきたいと思います。熱帯地域に住む人々は、紫外線を浴びすぎると皮膚ガンになるため、メラニン色素を多く含む「黒い皮膚」によって紫外線をブロックします。逆に北欧に住む人々は、紫外線が少なすぎるとビタミン D が十分に生成されず、その結果カルシウムの摂取が不足します。それを防ぐために皮膚や目、また頭髪の色が薄いことにより、紫外線を適度に浴びるようにできているのです。しかしこれらは、形質の多様性であり、人種ではありません。

以下は複数の質問・コメントをまとめたものです。授業では討論形式に発展しました。
〈分類について〉
Q　分類やラベリングをすると必ずそこから排除される人々が生まれます。どの分類にも入らない人々が出てくると思います。
Q　しかし分類がないと生活できないと思います。日常生活を営む上で便宜上ある程度の分類は必要だと思います。しかしそれ以上の細分化された分類は必要ないのではないでしょうか。
A　対照的な意見を出して頂きましたが、両方ともとても重要なポイントだと思います。分類による排除を考えてみると、たとえば身近な例では、性別を示すために「男」「女」という分類があります。日本ではトイレのサインに水色とピンクという色までつけられています。男が水色、女がピンク、という固定的な色の問題が一方であります。他方では海外のトイレの標識はわかりにくい、という反応も珍しくありません。
　より大きな問題は、「男女」という、その境界が明瞭であることを前提とした

二項対立的な枠組みから、性同一性障害などで悩み苦しむ人々の存在が排除されてしまうことです。

このトイレの事例は、分類による便利さと暴力という両義性を端的に表していると思います。

以上の議論に加えて、分類については、竹沢泰子編著『人種概念の普遍性を問う』（人文書院　2005）の総論６章「分類という常套手段と暴力」においてオリジナルな見解を提示していますので、参考にしてください。

〈分類と「承認の政治」〉

Q　差別することと区別することは異なるのに、混同されている時があるように思います。

Q　区別しなくなると、それらの人々のアイデンティティに対しても目を向けなくなるのではないでしょうか。

A　上記と関連してこれも重要な点です。差別することがいけないからといって、差異までも否定すると、マイノリティの当事者の多くの人が大切にしているそれぞれの文化的背景やアイデンティティまで否定することになりかねません。安易に、人間はみな同じ、という普遍説や同一説をもちだし、他の側面を否定するとそのような危険性に陥ると思います。しかしこの問題が複雑なのは、差異を常に主張しつづけるとどのような未来があるのかという問題です。これについても簡単な答えはないと思います。

どこまで分類するのが妥当か、あるいは必要だと考えるかは難しい問題です。主流社会の人々にとっての「必要」とマイノリティの人々にとっての「必要」の基準は必ずしも同じではありませんから。確かにあまり細かい分類は、日常生活を営む上でものごとを複雑にしますし、際限なく拡がる恐れが出てきます。

他方、マイノリティの多くの人々にとっては、自分たちのカテゴリーやラベリングが存在しなければ、自分たちの存在自体が承認されないことを意味し、尊厳が傷つけられる場合が多々あります。マイノリティであればあるほど、マージナル化されていればいるほど、そのカテゴリーやラベリングの存在とそれらの集団に対する平等な承認は、当事者のアイデンティティに大きなプラスの作用を及ぼしうるのです。平等な承認がなされなければ、マイノリティの人々はそれによって受ける傷を内面化しやすい状況が生じます。チャールズ・テイラーという政治哲学者は、「承認をめぐる政治(politics of recognition)」という

概念を使って、現代社会におけるアイデンティティの問題化について議論しているので参考にして下さい。現代社会においては、アイデンティティが政治を動かす上できわめて重要な要素となっています。しかし同時に、どこまで承認するのか、それにより何らかの解決策が見えるのか、については大きな議論があります。より専門的な議論を望む方は、拙論「アイデンティティ・ポリティクスのジレンマ」『新・国際社会学』（梶田孝道編　名古屋大学出版　2005）を参考にして下さい。

Q　人種の違いについては、振る舞いの違いは多少あるが、自分の経験からいうとほとんど違いを感じない。人種差別を目の当たりにしたこともなく、実感が湧きません。

Q　同じ街に住む外国人も、家に行けば食べ物が違うとか文化が違うとか感じることはありますが、日本語も上手だし、彼らを外国人だと意識することはほとんどありません。

Q　制度的差別は徐々になくなっていますが、人々の意識における差別はなかなかなくならないのではないでしょうか。現代日本社会においても「黒人ならではの身体能力」「黒人のリズム感」などについて語られる場面が多いように思います。

A　阪神・淡路大震災で焼け野原になった後、神戸の長田区にあるたかとり（野田地区）では、外国人と呼ばれる人たちだけでなく、沖縄出身者、高齢者らが集まって NPO で活動して、多文化共生を実感させてくれる空間が存在しています。そこでは、外国人が特別な存在ではなくて、それもひとつの個性だとみなす街が目指されています。私も、人種や民族にもとづく（と意識される）差異がひとつの個性のように捉えられる社会が理想的な社会のあり方ではないかと考えています。ダウン症の症状をひとつの個性と考えて欲しいと訴えるダウン症の子ども保護者のように、それぞれの差異が主流社会の権力によって排除されるものでなく、多元的な要素で社会が構成されていると意識される状態をイメージしています。

　しかし現実には、人種差別は日本社会でも存在します。クラスでは、実際に人種差別を経験した人も目撃した人もいなかったようですが、それは今まで恵まれた環境にいただけで、日本社会における人種差別・民族差別の実態から目

をそらすことはできないと思います。

授業では、私自身が子育てをする上で直接経験し、衝撃を受けたエピソードをいくつか話しました。保育園時代に定期購読していた絵本（児童書では有名な某出版社によるもの）を手にした時、その絵に衝撃を受けました。やかんから飛び出したという設定の主人公が、真っ黒な皮膚で、髪は縮れ毛、目はギョロ目、唇は真っ赤で分厚く、おまけにほとんど裸に近い格好で太鼓を叩きながらジャングルを歩き回るというものです。「黒人」に対する身体的ステレオタイプに加えて、「野蛮」「太鼓をたたく」などのステレオタイプ（固定したイメージ）も加えられており、アフリカ系の人々に対する偏見を大きく助長する類のものでした。抗議文を書きましたが、どこが偏見を助長するのか理解していない返事が届き、再度抗議文を書きましたが、それに対する返事はありませんでした。

この他、今は娘のベストフレンドである、ある韓国生まれの小学生に対するいじめについても話しました。「韓国人に生まれなければよかった」と本人が言っているというのを聞き、居てもたってもいられず、ひとりの大人としてできることはしました。その後その子に対する露骨ないじめはなくなりましたが、別の事件が起きました。ある時、英語を教えに来たアフリカ系の先生が帰った後、いじめの主犯格の子どもが、（握手をしたため）手が汚れた、と言って洗い始め、それをクラスのみんなが真似たという話です。この事件は、日本で保護者の意識が高いと言われている地域の公立小学校で起こった出来事です。拉致問題が表面化した後の朝鮮学校の生徒たちへの嫌がらせはよく知られていますが、人種差別はこれほど身近なところで起こっているのです。

どなたかの発言にあったように、制度的差別は徐々に是正されていますが、人々の意識の上ではまだまだ根強く残っています。

このように差別が存在する以上、その人種差別や民族差別を摘発する「道具」として「人種」という概念や用語は必要であると私自身は考えています。